

《修士論文要旨》

深沙大将の研究―意匠と信仰―

本論文では、深沙大将の意匠と信仰の定義を明らかにしていった。

第一章では、画像の分類を行った。分類方法は、平安後期から鎌倉時代に編纂された画像集のなかで最古のものであり、最も基本的な画像を収録している『画像抄』に描かれた画像を深沙大将像初期のものとして位置付け、その画像から八個の特徴を挙げていった。特徴の内容は、①忿怒の相②髑髏の瓔珞③腹の童子面④上半身裸体⑤獣皮・象頭を持つ膝丈の袴を穿く⑥右手を屈臂して掌を手前に向け、左手は臂を屈して蛇を持つ（左右は深沙大将から見て）⑦卷毛⑧踏み割り蓮華である。これらの特徴を画像、絵画、彫像に当てはめ体系化を行った。画像分類の結果、持物ではA…蛇を握る像、『画像抄』を踏襲する像、B…蛇を握らず、両手足に蛇を巻きつける像、C…戟を持つ像の三グループに分類することができた。しかし、CがA、Bに比べグループにまとまりが無いことから、更に髪型の分類を加えることにした。その結果、卷毛かつ蛇を握るまたは戟を執るA+Cと逆毛かつ蛇を両手足に巻きつけるまたは戟を執るB+Cの二グループに分類する

* 谷 口 舞

ことができた。そして、それらを基に変遷を見ていくと画像の系統は『画像抄』から派生するだけの単系統ではなく、Aの中で『画像抄』を踏襲する系統と戟を持つという系統に二分され、また他にBという別系統の計三系統が存在したのではないかと結論に至った。

第二章では、釈迦十六善神図・版本見返絵図（以下絵画）に描かれる深沙大将の分類を行った。十六善神図では、対に必ず玄奘三蔵が描かれていた為、深沙大将の意匠に影響があるのかどうかも合わせて検討を行うこととした。絵画について分類を行った結果、画像では見られなかった図様も現れた。その為、画像の分類に新たにD…卷毛かつ蛇を握らないとE…逆毛かつ蛇を握る加えることとした。また、絵画は画像や彫像と異なり、対に必ず玄奘三蔵が描かれている。その為、玄奘三蔵の分類も行った。絵画を分類した結果、深沙大将と玄奘三蔵の組み合わせの程度形式化された図様を確認することができた。また、絵画で描かれる深沙大将は、省略や簡略化された像もある為、考察する目安の一つとして玄奘三蔵が対で描かれるということが

重要となっていくことがわかった。

第三章では彫像の特徴について論じた。図像・絵画同様に分類を行い、その結果を図像、絵画の時系列大系と照らし合わせ、深沙大将像全体の流れを確認していった。その結果、初期の姿と位置付けたAに分類されるものは三像と少なかったものの、Aに分類された京都府金剛院像は『図像抄』や正倉院扉絵像を踏襲している可能性がある。また東京都深大寺像も現存像は鎌倉時代制作であるが、それ以前に深沙大将像が安置されていた可能性があり、現存像がそれを踏襲している可能性がある。因って、図像や絵画ではBの出現時期がAより先か後かが特定できなかったが、彫像ではAの後にBが出現するという、AからBという流れがあるという可能性を導くことができた。

第四章では図像や絵画では見られなかった独特の意匠を信仰面から検討していった。また、独特の表現が見られない像も、各寺でどのように信仰されていたのかを検討し、定義付けを行った。その結果、深沙大将には一像でいくつもの性格を持って信仰されていることが確認できた。香川県弥谷寺像では、泰山府君、水神、蔵王権現としての信仰。福井県明通寺像では、観音菩薩、金剛夜叉明王、坂上田村麻呂に関する信仰。岐阜県横蔵寺は、水神、玄奘三蔵の守護神としての信仰。大分県高瀬磨崖仏像は民間信仰の結集。金剛院像は、真如親王の守護神、重源の山岳信仰を表現。和歌山県金剛峰寺像では金剛院像より重源の信仰を具現化。深大寺像は水神信仰。奈良県杵築神社像は、泰山府君、葛城信仰、水神信仰、毘沙門天を介する信仰。京都府醍醐

寺は毘沙門天との関係、水神、泰山府君、観音信仰を導き出した。

これらの結果から、深沙大将の意匠は、『図像抄』を基準とした八個の特徴に逆毛や戟を加え、そしてその中のいくつかを組み合わせて構成していることが確認できた。ただし、蛇を握るもしくは巻きつける、鬻腰の環珞をかける、腹に童子面がある、象の膝あてもしくは袴を穿くという象徴的な特徴が一つでも入ることが条件となるようである。信仰は、水神と蔵王権現としての信仰が多く、次いで泰山府君や守護神、そして観音菩薩や毘沙門天とする信仰が後に続いた。そしてこの中から二つ以上を組み合わせて信仰していた。因って深沙大将の定義は、意匠が蛇、鬻腰の環珞、腹に童子面、象の膝当てという象徴的な特徴を一つ以上持ち、かつ水神、蔵王権現、泰山府君、守護神、毘沙門天、観音菩薩という信仰を二つ以上持つ尊格をいうこととなった。